

③ヘレン・ケラー、

温故学会を訪問

昭和二年（一九三七）四月二七日





「ヘレンケラーと埴保己」選集」

熊本ライオンスクラブ40周年記念より

ヘレンケラーと岩崎武夫、二人の出会いは一九三四年（昭和九）、武夫がアメリカのハバフォード大学およびキリスト教関係諸団体の招きで渡米、講演旅行中にフォレスト・ヒルズのケラー邸を表敬訪問したときが始まりとされています。

二人の友情は極めて強く、ヘレンの三度の日本訪問は、いずれも岩橋が中心となって招いたものです。

すなわち：

第1回：一九三七年（昭和12）

虚構橋事件の直前

第2回：一九四八年（昭和23）

戦後の混乱期

第3回：一九五五年（昭和30）

岩橋武夫への墓参

「ヘレンケラーと埴保己」選集」

熊本ライオンスクラブ40周年記念より

ヘレンケラーと埴保己一、この両者がわれわれに語りかける共通点がある。

それは立場を超えた人類愛である。

すなわち、埴保己一の群書類従はむしろ**晴眼者**のために便宜を図ったものであり、いっぽう、ケラー女史の盲人福祉活動のきっかけは**予防可能な盲目**（その多くは新生児網膜症による）の根絶を目指したものであった。

（ヘレンケラーに希望を与えた日本人

「ヘレンケラーと埴保己一選集」）

「これまで盲人といえは多くの場合、慈善、憐憫（れんびん）、侮辱の対象にされてきました。目が見えなくなったのは神の罰を受けたのだと考えられて盲人といえは路傍で物を乞い、住所は養育院と相場が決まっております。

そのような誤った認識は改めてほしいのです。また、盲人を不必要に甘やかさないでください。

盲人が造ったものだからといって役にたちもしない、つまらないものを買って下さるのは、少しも善いことではなくかえって盲人のためにならないのです。

一例を挙げればビーズ細工ですが、あれなどは誰の目から見ても良いものとは思えないのに、盲人の代表的作品としてこれまで憐憫の情をもって通用してきたのであります。」

（ヘレンケラー著「私の生涯」）